

ポニーテールバスケット部女子が、後輩の男の子に匂いを嗅がせる話

8月の夏休み、暑さがピークに達した午後、練習が終わったコートは蒸し風呂のように熱かった。美優は汗だくでユニフォームを着たまま、悠太を目で追った。彼女の体からは、夏の暑さと激しい運動からくる汗が滴り落ち、ユニフォームは彼女の体に張りついていて、美優の髪はポニーテールにまとめられ、動くたびにその長い髪が風を切る。汗はそのポニーテールの先端からポタポタと滴り落ちるほどに暑かった。

「悠太、今日もお疲れ様。ちょっとストレッチを手伝ってくれない？」美優は笑顔で悠太に声をかけた。彼女の笑顔は一見優等生らしい清廉さに満ちていたが、美優の内面には誰も知らない変態的な欲望が渦巻いていた。

「え、うん、もちろん！」悠太は少し驚いた顔をしながらも、美優の強い視線に逆らえずに近づいてきた。

美優は悠太の手を取って、彼を自分の前に立たせた。彼女はゆっくりと脚を伸ばし、悠太にその脚を持たせる。

「ここ、もっと伸ばして…」美優の声は甘く、悠太の心を揺さぶった。彼は彼女の足を慎重に扱いながら、美優のユニフォームから漂う濃厚な汗の匂いに気付いた。そこには苦い酸味と塩気が混ざり合い、まるで海辺の潮風のような爽やかな刺激があった。

「(悠太…この匂い、臭くないかな…?)」美優は心の中で不安を感じながら、悠太の反応を窺った。「どう？今日の私の匂い、臭くない？」

「う、うん…全然臭くないです…むしろいい匂いしますよ…」悠太は顔を赤くしながら答えた。彼女の匂いを嗅ぐことが、なぜか嬉しかった。

「(やった…！悠太嬉しそう！)」美優は心の中で喜びを抑えきれなかった。

「(この匂い…もっと嗅ぎたい…)」悠太は心の中で叫びながら、美優の足を押し、彼女の体臭を深く吸い込んだ。酸味と甘い匂いが混ざり合い、まるで熟した果実のような魅惑的な香りを放っていた。

ストレッチ中に、美優はポニーテールを振り、うなじが露わになった。そこからは、汗とシャンプーの香りが混ざった、甘くて刺激的な匂いが漂っていた。

「(美優さんのうなじいい匂い…)」悠太は心の中で思った。彼女のうなじに近づき、その匂いを深く吸い込んだ。そこから漂う匂いは、彼女の存在感を強く感じさせ、悠太をさらに深く引き込んだ。

美優は悠太を観察しながら、彼女自身の匂いが彼にどれだけの影響を与えているかを楽しんだ。彼女は

自分の体から発する匂いが、悠太の感覚を支配していることを感じ取り、心の中で微笑んだ。「(悠太、私の匂いに夢中になってくれてる…♪)」

ストレッチが終わりかけた頃、美優は言った。「ねえ、悠太。英検が近いから、私が勉強教えてあげるよ？私の家で。」

「え、いいんですか？」悠太の心臓は早鐘を打ち始めた。

練習後、美優はユニフォームから制服に着替え、悠太はその変化に気付いた。彼女は制服を着ていたが、さっきまでのユニフォームの匂いがまだ彼女の周りに漂っていた。

美優の家に着くと、彼女はすぐに自分の部屋に案内した。そこには普段の美優の甘い桃のような匂いが残っている。

「この部屋、暑いね。」と美優は言いながら、制服を脱ぎ始めた。彼女の下には、練習で着ていたユニフォームがそのまま着用されていた。彼女がポニーテールを振る度に、うなじから微かに香る匂いが悠太の感覚を刺激した。

「(この匂い、夢中になっちゃう…)」悠太は心の中で思った。

「ここで勉強しようか？」美優はテーブルに英語の教科書を広げながら言ったが、その視線は悠太に向けられていた。彼女は我慢ができなくなったかのように、悠太に近づき、彼のシャツの裾を掴んだ。

「悠太、私悠太のこと好きなんだ。悠太は私のこと好き？」美優はそう言いながら、悠太の顔を自分の首筋に押し付けた。そこには練習後の体臭が色濃く残っており、まるで夏の夜の花園のような甘さと野性味を漂わせていた。

「好きです。美優さんのこと、はじめて見た時から好きでした。」美優の甘酸っぱい果物のような匂いに包まれながら、悠太は告白した。

「(これで、悠太も私の虜に…♪)」美優は心の中で喜んだ。